
宇宙戦記

柳沢紀雪

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙戦記

【Nコード】

N9468E

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

人類が地球を飛び出し数百年後の世界。火星に移り住んだ人類は地球からの独立を求めて戦争を引き起こす。第一次星間戦争、火星独立戦争と称されるこの戦争は人類史上初めての宇宙戦争として歴史に名を残す。その戦争の英雄、本山美由紀は火星統合宇宙軍に所属する軍人である。彼女は、試作艦の実験航行の責任者として徴用され、アステロイドベルト近傍の補給基地へと向かうこととなる。しかし、その実験航行の裏には一つの思惑が隠されていた・・・。現代の科学技術をベースとして発展する未来。人類は宇宙で如何な

る発展をするのか。そこで引き起こされる戦争とはどのようなものか。思考実験に近い設定に基づく空想宇宙科学技術小説。

（１）（前書き）

人類が宇宙に進出した場合、そこで描かれる戦争とははたしてどのようなものになるだろうか。その疑問から今回の執筆は始まる。現代の宇宙航行技術もめざましい発展を続けており、今考えた未来の技術も後１０年も経てば過去の遺産となる可能性も否定できない。火星と地球。最も近い惑星の間に空間を限定して宇宙の戦闘を思い描けばどうなるか・・・はたして・・・。

(1)

(1)

空調の音が響き、窓の外には暗黒の宇宙が映る。見上げる空は、大気下で見るそれとは、また違った様相を示している。200mmもの分厚いアクリル製の窓に手を触れても、伝わってくるのは宇宙の冷たさではなく、空調によって制御された無機質な感触だけ。

次第に人の波も大きくなってきた。

スペースポートを一望できる展望台に設けられたオープンテラスのカフェには、モーニングコーヒーを楽しむ客でにぎわっているが、その隅の一角には、そういった者達にとっては近寄がたい雰囲気が漂っていた。

宇宙の無重力空間では邪魔になる長い髪を、後ろでまとめている姿はそれほど珍しいことではない、事実、このカフェにいる女性の殆どが彼女と同じようなヘアスタイルをとっている。

しかし、堅苦しい軍服に身を包んだ軍人は、存在するだけで周囲を威圧する雰囲気があるようだ。

多少軍隊に関心がある者なら、彼女の襟と胸の階級章を見れば、彼女が火星統合宇宙軍の戦佐（旧階級で中佐にあたる、詳しくは付録の1を参考に）であることはすぐに分かるだろう。

一般人からは軍人であるためにさけられ、下士官や若手の士官からはその階級章が原因で敬遠される。そして、彼女の経歴を知るものなら、顔を見ただけで避けて通りたくなるのもある意味自然なことだ。

だから、彼女はいつも端の方に席を置いている。

今、スペースポートから船が飛び立っていた。展望台からは出航する全ての船を見ることができる。今、出航して行ったのは方向からしてどこかの衛星軌道都市（火星の衛星軌道上に位置する居住都

市。俗には都市と呼ばれる）に向かつていったのだろう。

鷹宰工業株式会社のロゴが入った、とりわけ珍しくもない船を目で追いながら彼女は、立ち上がった。

火星の宇宙船の時間は正確だ。だから、朝はそれを時計代わりにする者も少なくない。

念のため彼女も時計を確認すると、傍らに置いてあったバッグを手にとると、スペースポートに向かつていった。

このスペースポートは中央連絡都市と呼ばれ、全ての都市から出航する連絡船の中継基地になっている。都市から出航した連絡船は必ずこの中央連絡都市に入港し、乗客はいったんこの都市を経由して目的地へとたどり着く。軍人もその例外でなく、軍事都市に足を運ぶためには必ずここを経由することとなる。

しかし、一般に比べて軍人は朝が早い。よつぼどの理由がないかぎり一般人と軍人がこの都市で出会うことはないだろう。

彼女がいま、ここに居るのはそんなよつぼどのがあったからである。

彼女は、その時のことを思い出したため息をついた。

数日前、彼女には一つの命令が言い渡された。命令自体は、この日に軍の司令所に出頭すること、だけであつた。何のための出頭か、その目的も聞かされていないのは少しやくに障つたが・・・、「ウィリアム君がこんな風に呼び出すときには、ろくなことがないのよね・・・。」

普段は使わない宇宙軍本部基地（通称、イクシオン）へのパスをしまいながら、彼女、本山美由紀もこやま みゆきはまたため息をついた。

彼女の言う、ウィリアムとは、宇宙軍の総司令官、ウィリアム・レガート提督のことだ。美由紀は士官候補時代から彼とは面識があり、友人といつてもいい間柄だ。

それ故、彼女は彼から様々なやつかい事を押しつけられることも多々ある。それが極めて不快だと思つたことはないが、大変な名譽だと思つたこともない。

宇宙船に通じる移動廊下には、この時間帯では行き交う軍人は少ない。彼女は、そんな彼らと略式敬礼を交わしつつ停泊中の船に向かって歩いていった。

人類が宇宙に進出し、数百年もの年月が経過した。既に、人類は母なる大地を離れ、地球衛星軌道上や月面、火星にその生活空間を移すことに成功している。

火星に移住した人類は、やがて地球から政治的、経済的な独立を望むようになった。そして、地球が火星に対して行った強攻政策を皮切りに、火星は地球に対して宣戦布告を行った。人類初の宇宙戦争が始まった。

後に火星独立戦争（地球では、第一次星間戦争と呼称）とされる戦争は、地球と火星のほぼ中間に位置する宙域、俗にナイチンゲール海域に置いて終戦（これをナイチンゲール海戦と呼ぶ）を迎える。地球と火星は休戦条約を締結し、事実上、火星は地球からの独立を勝ち取った。

火星独立戦争の最大の戦場となったナイチンゲール海戦は一つの伝説を生み出した。その当時、一個中隊の指揮官であった本山美由紀は、崩壊寸前だった火星軍一個大隊をまとめ直し、結果的にその戦場を勝利へと導いた。

「彼女なくしては火星の独立はあり得なかった。」

それは、その当時の宇宙軍総司令の戦勝宣言の一文だった。

(2)

(2)

イクシオンは衛生軌道上に浮かぶ都市群の中でもとりわけ奇抜な様相を呈していた。

一般的な居住都市の殆どが回転する円筒のような構造をしているのに対して、イクシオンはトーラス型の構造物が、あたかもソレノイドのように幾重も重なったような構造をしている。

回転する事で生じる遠心力による加速度は、その点の速度の二乗を回転半径で割った値に等しい($a = v^2 / r$ 、 a : 加速度、 v : 速度、 r : 回転半径)。

イクシオンのトーラス型の層は、回転することによって生じる遠心力を擬似的な重力としている。

(層の半径は20kmであるので、その表面で1Gを得るためには、およそ毎時1620kmの速度で回転しているということになる。)

その都市の中央の層に位置する戦略会議室の近くには、宇宙軍総司令官であるウィリアム・レガートの執務室が設けられており、彼の仕事はここを拠点に展開される。

今日もその例外ではなく、彼は部屋の中程に据え付けられた机に座り、難しい顔をして書類をにらんでいた。

「やはり、状況は余談を許さんか・・・。」

彼はPD(ペーパーディスプレイ)の略、詳しくは付録の2を参考に)の書類を机に置くと、さらに苦い表情を浮かべた。

その表情を見る限り、その書類には彼にとっては不都合なことが記載されていたのであろうことは明確である。

「失礼します。提督、お茶が入りました。」

ウィリアムの執務室の一角に備えられた扉から姿を現したのは、きつちりとした軍服に身を包んだ年若い女性だった。

年若いと言っても、入りたての新人らしい初々しさはなりを潜め、仕事に対して一定の割り切りを持つ落ち着いた物腰を持つ女性のようだ。

しかし、堅苦しい軍服に身を固めていても、その内からにじみ出る若さは隠しようがなく、見る者が見ればそのギャップから愛らしさを感じ取ったかもしれない。

ウィリアムは、それを見て少しばかり口に笑みを浮かべると、自分の秘書に対して「ごくろう。」と一言だけ言って、紅茶の入ったカップを受け取った。仕事中等であるため、茶請けのクッキーを口にすることはできないが、彼好みに入れられた紅茶を一口飲んだだけで、心に平穏が訪れるようだ。

ウィリアムは、それに満足したのか、全て飲みきらないうちに力ツプをおろすと、待ち人の到着を聞いた。

「シャトルの到着の報告は受けています。後、10分ほどで到着すると思われます。」

彼の秘書はあくまで事務的にそう告げると、彼に一揃えの書類を手渡した。それには、今日美由紀に伝えることになっている任務の詳細が記された書類だった。その文頭に極秘（Top Secret）と記されていることから、その任務がいかに重要なものか、また、彼がその待ち人をいかに信頼しているを伺うことができる。

彼は簡単に文面と内容を確認すると、その最終頁の一番下の欄に直筆のサイン（モニターペンシルだが、感圧センサーのログから筆跡鑑定も可能）をすると、それを秘書に返した。

「なお、上層部に多する報告書は、先日作成した書類に基づき作成しておきました。既に転送済みですので、何の問題もないと思います。」

ウィリアムは無言でうなずくと、時間を確認した。時間からして、そろそろ待ち人が到着する頃だ。

「それでは、私は会議室の方へ向かいます。」

秘書はそう言って、敬礼すると執務室から出ようとした。

「本山戦佐には先に私の部屋に来るように言っておいてくれ。他の者は待たせておくように頼む。」

秘書は一言「了解しました。」とだけ言つと、扉の向こうに消えた。

ウィリアムは、のみ差しの紅茶を手に取ると、それにゆっくりと飲むことで待つことにした。

イクシオンの通路を歩く時には、いつも不思議な感覚に襲われる。美由紀は何となく周りを見回した。イクシオンの通路は、半径20kmの巨大な円形をしている。つまり、自分はその円の内壁に沿って歩いている事になり、60kmも歩けば自分は、今立っている場所からちょうど反対側に移動することになる。

しかし、何も考えずに歩いている分には、この通路はまったく水平に伸びているように感じられるだろう。実際、100m歩いただけではその高低差は25cmにも満たない。これが坂道ならば多少の勾配を感じるかもしれないが、円筒内の遠心力は常に床に対して垂直にかかっているので、高低差を感じる事は皆無である。

60km先にいる人間が自分とは逆さまに立っているといわれても、何かの冗談のように感じてしまうのだ。

「本山戦佐。」

突然、聞き知った声が彼女の背後から響いた。

美由紀は、立ち止まって振り向いた。

そこには、ウィリアムの秘書の女性が立って敬礼をしていた。

「久しぶりですね。カナン・フォーリア戦尉。」

年はカナンのほうが2つほど上だが、立場上、彼女よりも三つ上の階級になる美由紀は、カナンに敬礼を返した。

美由紀が手を下ろした事を確認し、カナンも敬礼を直すと、「レガート提督より伝言があります。」と言つて、先ほどウィリアムに

言われたことを彼女に伝えた。

カナンが後ろから来たと言うことは、ウィリアム君に言伝を命じられて部屋を出たところで、自分が会議室に向かう所に出くわしたのだらう。相変わらずウィリアム君は面倒くさがり屋だ。そういうことは事前に伝えておいてくれてもいいだらうに。

と、美由紀は推察すると、「失礼します。」と言って会議室に向かおうとするカナンに敬礼を返して、今来た道を逆にたどることにした。

会議室に呼び出されてたという事は、今回呼び出されたのは、私だけではないだらう、この分では先に来た人たちを待たせることになりそうね。

と、思いながら彼女は3mほど歩いた所にある、ウィリアムの執務室のドアをノックした。

「入りました。」

ノックに答えたのは、面倒くさそうだが内に何か野望を隠し持っている人間の声だった。

何も変わらない、彼は士官学校時代からこうだ。彼は、自分の理想を謳うときにもどこか他人めいた話し方をしていた。それは、いかにも興味がなさそうな、自分とは全く関係ない者の事を吹聴する Such かなのような口調だった。

美由紀は、その声を聞いてむしろ安心を覚えた。あのとき、自分とともに語り合った理想は、確かに彼との共通の理想として根付いていると確信が持てた。

「どうした。入らないのか。」

少し思想の海にとらわれていたのか、美由紀は突然現実に戻され、赤面しつつ「失礼します。」といって執務室に足を入れた。

執務室の中央奥よりもつけられたデスクには、けだるそうな表情のウィリアムが座っていた。

美由紀が入るまで喫煙中だったのか、部屋の中にはわずかながらタールのにおいが残っていた。

空気循環の効率と寿命のために、一般の軍人には喫煙は許されていないが、彼ほどの階級の人間なら特権が許されているらしい。美由紀は煙草を吸わないが、その特権は彼女にも与えられている。

「ひさしぶりだな、美由紀。元気だったか。」

ウィリアムは、まるで旧知の親友と再会したかのような挨拶をするが、

「お久しぶりです、レガート提督。私の方は問題ありませんでした。」

美由紀は、あくまで軍人として敬礼を交えた挨拶を投げかけた。

ウィリアムは、くすぐったそうに笑うと、

「ここには俺とお前しか居ないんだぜ。おまけに監視カメラも盗聴器も特権を生かして外させた。つまり、俺とお前がどんな会話を交わそうが、それをとがめる人間はこの太陽系の何処にもいないってことだ。」

「しかし、そういうわけには・・・。」

「俺にこんな命令をさせないでくれ。いらないところでお前に貸しを作りたくない。終いには、俺と結婚しろと”命令”しなければならなくなるじゃないか。俺は、自分の力でお前の心を奪ってみせると誓ったばかりなんだぜ。」

美由紀はため息をついた。これ以上の押し問答は不毛だと判断し、彼女は少しの間だけ軍人であることを忘れることにした。

「プロポーズの台詞を普段から使うことに、戦術的意味はないって、いつも言っていると思うけど。」

そういつつ、美由紀はそばに備えてあった椅子に腰を下ろした。

「だったらもっと雰囲気のあるところで言えばいいのか。」

「少なくとも、ここで言うよりはずっといいと思うけど。」

「星空の下で言ったときも振り向いてくれなかったじゃないか。」

「雰囲気と答えは別よ。少なくともその雰囲気を楽しめるってこと。」

二人は一通りの雑談を交わすと、表情を改めた。

ウィリアムは「さてと。」と言うと、執務机に深く腰掛けた。

美由紀は部屋の空気が変わったことを察すると、忘れていた軍人である自分を取り戻した。

ウィリアムがわざわざ美由紀を執務室に呼び出したのは何も雑談をするためでも愛を語らうためでもない。

なぜ彼が、この部屋に事前に来るように伝えなかったのか、カナシに言伝させ直接伝えるというまどろっこしい方法をとったのか。

それは、単に今から話すことが誰の耳にも入ってはいけないということであり、彼が信頼する以外の者が、彼と彼女が直接面会していることを知られるわけにはいけないということである。

ウィリアムは、一瞬とても難しい表情を浮かべると、引き出しにしまっていた書類を取り出し、美由紀に差し出した。

美由紀は無言でそれを受け取った。その表面を触れると、『Top Secret』の文字が浮かび上がった。

そこには、何かを入力するための空欄がぽっかりと穴が開いたように映っているだけだった。

そのほかは、何もない。ページスクロールキー（PGSキー）をおしても何の反応もしない。

「読めないわ。セキュリティがかかっているみたい。」

美由紀はこの手の書類には慣れているため、特に不可解にも思わずにそう呟いた。

「今パスワードを教えるわけにはいかない。その意味は理解できるな。」

美由紀は静かに首を縦に振った。

理解するまでもない。今教えられないと言うことは、やがて知るべき時が来ると言うことだ。ならば、今はその時を待てばいいだけの話。難しい話ではない。

「よし。話はここまでだ。すぐに会議室へ向かえ。少し時間が過ぎているが、問題ないはずだ。」

美由紀は、その書類を自分のPDにファイリングすると、一言だ

け「失礼します。」と敬礼を交えながら挨拶をすると、その足で部屋から出て行った。

扉が閉まる音が部屋に響き渡ると、ウィリアムは深いため息をつき、背もたれに大きく寄りかかった。

「やっかい事を押しつけるのは毎度のことだが．．．、今回はかりは．．．、罪悪感のほうが大きいな．．．。」

「．．．死ぬなよ．．．美由紀．．．。」

そう言っていると、彼は手元の通信機のスイッチを入れた。

(3)

(3)

美由紀がミーティングルームにはいると、そこには三人の軍人がすでに在室だった。

十数人入りの広いミーティングルームには、普段は長い机と十数の椅子が備えられているのだが、今は正面のスクリーンの前に三つの椅子が備えられているだけにすぎない。

その椅子の二つを占めているのは、美由紀も初めて見る顔だった。「お待ちしておりました、本山戦佐。ずいぶんゆっくりとお話をされておられたんですね。」

敬礼を交わしあつたとたん、皮肉めいた言葉を投げかけたのは、美由紀よりも少しだけ年上に見える男性だった。

少し茶色のかかった短い髪は彼がまだまだ若々しい感性に恵まれているということがうかがい知れる。

その胸の階級章によると彼はどうやら戦尉長のようなのだ。

「あ・あ・あ・あ、申し訳ありません……。その……。重要な話でしたので……。」

美由紀は萎縮してしまった。

彼女は今までいわれのない中傷を受けたことは何度もあつたが、ここまでとげとげしい言葉を投げかけられたのは殆ど初めてだった。「秋月戦尉長。今の発言にはかなりの問題があると思うが？」

それは、ずいぶん訛りのある火星標準語（付録3）を扱う男性だった。

年の頃は30代半ばほどだろうか。その落ち着きと威厳は、応に指揮官にふさわしいと言える。

秋月と呼ばれた男性は、彼を一瞥すると乱暴に舌打ちし、椅子にどっかりと座り込んだ。

「秋月戦尉長の言ったことは気にしないほうがよろしいですよ。」
そう言うのと彼は右掌を美由紀に差し出し、「お会いできて光栄です。
本山戦佐。」握手を求めた。

美由紀はその柔和な笑みに励まされ、自分も笑顔を浮かべた。二人は軽く握手を交わし、互いに自己紹介を交わした。

美由紀と握手を交わした男性、サライト（サライト・E・カサラ准戦佐）は秋月の隣に座り、美由紀はそのさらに隣に座った。

ようやくこれでメンツがそろい、会議が始められることに安心したカナンは、手元の端末を操作し、モニターを立ち上げた。

会議室正面に設えられた大型モニターは電子音を奏でながらゆっくりと画像を映し出し、それが意味のある映像に切り替わるまで5秒の時間がかかった

その5秒間の間にカナンは、今回の会議の詳細が書かれたPDを3人に配ると、モニターの前に歩を進めた。

三人はその資料に目を落とした。

紙を捲る音は聞こえないが、PDから発せられる光の明滅から誰もがかなりの速度で頁に通してると言うことは伺える。

こういった資料は、本来ならもっと事前に本人達の手元に届けられるはずだ。しかし、今回に限ってなぜか全てのことが直前になって行われている。

その理由を理解しているのは、おそらく美由紀とカナンだけだろう。この二人は、何の理由もなくウィリアムがこんな手段を使うことはないと言うことを知っている。

「正直言って拍子抜けだな。」

一足早く資料を読み終えた秋月は、そのPDを備え付けの机に投げはなった。

サライトはそんな彼に一瞥やるが、特に追求せず、その代わりに口を開いた。

「つまり、次世代型の試作巡洋艦の実戦テストを行うために、アステロイドベルト近傍の宇宙都市、つまりアルフィリオン中継基地に

行け・・・ということですか。」

サライトは、資料に書かれていた内容を正確に把握できているようだ。今回の会議の要点は、全て彼の一言に要約されている。

「お察しの通りです。最近になって宇宙軍が、次世代型の巡洋艦のトライアルを行っていると言うことは既にご存じかと思えます。」

カナンの言うことに二人は肯定を示した。

「何でも、戦闘機を搭載できる巡洋艦を建造するというのが目的だったな。」

秋月の言うとおり、昨今の軍事情勢（付録7）から見て、その必要性はすいぶん前から指摘されていたことだった。そして、つい1年半前その試作計画が正式に議会を通ったのだった。

「巡洋艦だけでなく、駆逐艦と、情報戦に特化した駆逐艦ですね。」

美由紀もそのニュースの事をよく理解していた。

三人の反応を見て、カナンはうなずき、モニターに画像を投影した。

だいむら

大村重工業の丸いロゴがモニター上を二、三転すると、映像はなにやら箱を敷き詰めたようなものを映し出した。

一見すればわかりにくいが、軍人である彼らにとって、それは実に見慣れたものだった。

「これが、このたび皆さんに乗船して頂くことになる巡洋艦の全貌です。」

その巡洋艦はお世辞にもスマートな形をしているとはいい難い容貌をしている。重力下では流体を考慮する意味で飛行物の大抵はスマートな流線型をしている。しかし、無重力空間では抵抗の強い流体は存在しないため、流体を考慮したフォルムをとる必要がなく、むしろステルス性が重要視されるようになる。ステルスを重視するなら、そのフォルムは箱を敷き詰めたような形になってしまう。

カナンは説明を続けた（付録6）。

ミサイル巡洋艦アークソルジャー。この艦が建造される理由は二

つあった。

昨今の軍備研究者の言葉を借りると、今後軍隊行動として重要視されるべき事は、艦隊の機動性にある。そのため、それまで両惑星政府が躍起になって建造していた大型空母は艦隊の機動性を著しく損なうという批判が相次いで提出されることとなる。

しかし、大型空母を配備しないとすると艦隊の戦闘機保有数が著しく低下することとなる。

戦闘機の保有数の低下はそのまま艦隊の戦力の低下へとつながる、その問題を解決する方法として従来戦闘機を搭載していなかった巡洋艦や駆逐艦に搭載させることでその問題を解決した。それが、今回アークソルジャーが建造された大きな理由である。

「人員の選定は？」

説明が一段落したところで、秋月が質問をした。

その質問は確かに上級士官として気になる所であろう。美由紀もサライトもカナンに目をやった。

「人員の選定はすでに終了しています。各員への通達は本日付で送信される予定で、3日後には確定する予定です。」

「了解。」

「他に質問は？」

サライトが手を挙げた。

「どうぞ。」

「なぜ、アルフィリオン中継基地へ行く必要が？トライアルなら本国の宙域で行えばいい。」

「上層部からは極限環境下においても問題なく運用できるかを測りたい、と聞いています。」

「ありきたりの理由だな。そんなもんでアステロイドまで飛ばされるとは、たまったもんじゃねえな。」

秋月の不穏な言いぐさにサライトは特に口を挟まなかった。

アルフィリオン中継基地とは、火星と木星の中間にある小惑星帯^{アステロイドベルト}の入り口に存在する中継基地である。この基地は、火星にとって

生存に密着した重要な拠点である。

火星の資源の大半は、小惑星帯に存在する鉄やアルミ、チタン、クロム、ニッケルなどで賄われている。さらに、軍艦や宇宙船、コロニーの動力となる水素は、そのさらに向こうにある木星のから採取される。

つまり、小惑星帯、木星へ通じる航路に存在するアルフィリオン中継基地はその資源採掘のために編成された船団（資源輸送船団）が補給の拠点として使用されるため、火星には無くてはならない場所と言うこととなる。

しかし、火星からアルフィリオン中継基地までには0.3天文単位（およそ4500万km分）かり易く言えば、地球を1100周した距離）もの距離が広がっている。通常の軍艦であれば、その途中で1度や2度の補給を行わなければならない距離だが、輸送船団が使用している大型輸送船は元々長距離を航行するために建造された船であるため、そこまで頻繁な補給は必要としない。

また、軍事的に重要とされる宙域は火星公転軌道円内で在るため、アルフィリオン中継基地に軍艦が頻繁に行き来する状況は考慮に入られていない。

つまり、そんな場所に無補給でいくには大量の補給艦を引き連れていく必要があり、また、その分艦隊の進行速度が低下するため乗組員の士気の低下は免れない。

秋月の言い分もある意味では正論ともいえる。

「他に質問はありますか？・・・では、これでミーティングを終了いたします。」

カナンはモニターを閉じると、一度敬礼しミーティングルームから出て行った。

付録設定集（1）（前書き）

本文では説明しない設定を掲載。基本的にはこれを見なくても本文を読み解くことは出来る・・・と思う。

付録設定集(1)

1. 階級称号

旧称号	火星統合軍の称号
大将	大戦将長
中将	戦将長
少将	戦将
准将	准戦将
大佐	戦佐長
中佐	戦佐
少佐	准戦佐
大尉	戦尉長
中尉	戦尉
少尉	准戦尉
准尉	准戦尉補
(下士官)	
曹長	軍尉長
軍曹	軍尉
伍長	准軍尉
兵長	軍士長
上等兵	上等軍士
一等兵	一等軍士
二等兵	二等軍士

地球の軍隊では、今でも旧階級称号を使用している。

2・PD

ペーパーディスプレイ（Paper Display）の略。これは、厚さが紙ほどのスクリーンで、用途は現代の我々が使用している紙と同じ。書類や文面による報告書、書籍などはほぼ100%これに変わっている。ページスクロールキー（PGSキー）をおすことでページを捲ることができる。形としては、ハードカバーのよな表紙（厚さは1.5mmほど）に紙が一枚だけ挟まっているという形式。ハードカバーの表紙には、バッテリーとメモリースティックを挿入する端子、HDD、CPUが内蔵されている。また、ネットワークに接続する機能も標準装備されている。

MP（Monitor Pencil。モニターペンシルの略）も備え付けられており、PDに対して紙と鉛筆と同じ感覚で書き込むことができる。MPの先には感圧センサーが付いており、それで筆圧の鑑定が可能で、指紋鑑定も基本装備されている、設備に少しばかり金をかければ、虹彩、網膜、声紋鑑定も可能になる。

なお、軍部で使用されているものにはメモリースティックが内蔵されており、取り外しは不可能で、ネットワークに接続する装置も付いていない。大きさはA4、またはB5サイズと規格化されている。

PDは正式には紙のことをさす単語だが、一般的には、カバーと紙をまとめたものとして広く浸透している。現代で言うPCと同じような位置づけ。これだけコンパクトに、さらに高度な処理が可能になった要員として量子コンピューターの実用化と軽量化が大きな要員となっている。

表紙を、適度な角度に開いて固定し、ディスプレイを片方に固定し、キーボードを呼び出すと、従来のPCと同じ機能を得ることができる。なお、キーボードは機械スイッチのたぐいではなく、二

次元に投影されるグラフィック方式となつていたので、現代のPCのようなキーボードの打ち心地を得ることはできない。

3・火星開拓に関して

かつて日本の経済力と技術力は世界的にも下の水準まで落ち込んでいた。しかし、その打開策として日本政府は経済立て直しのための1000カ年計画を打ち立てる。それは、宇宙開発着いては火星地球が計画を最終目的とした国内技術の向上だった。

宇宙開発、それに追隨する技術力向上のために政府は多くの予算を割き、国の技術レベルの底上げを図った。

工学系大学の教育方式の改革、国際技術者の積極的な養成とそれに追隨する資格の充実化。そのために様々な方策が成される間に日本の宇宙開発は着々と進み、20年後には日本独自の地球～月間の中継ステーションの開発を成し遂げ、月に強大なプラントを建設、地球から打ち上げる必要のない惑星間航行船の建造を行い、そして5年後には火星の衛星軌道上に火星地球化計画の礎ともなる居住実験施設を建造、それをアマテラスとなづけ、本格的に火星開発を行う。その成功を機に各国が火星開発に乗り出し最終的に日本が宇宙開発1000カ年計画が終了する頃には火星には多くの入植者が自力で生活できる環境ができていた。

その成功の先駆者として日本は国際的星間的にも高い評価を得、火星入植に関する権利を勝ち取る。

故に火星の行政や上層会議にはその過半数の人員が日本人でしめられている。日本はこの成功を機にアメリカに替わる星間社会の中心国として認められる。

火星標準語が英語ではなく、日本語を源流とした言語であるのはこのためとされている。

4・アークソルジャー構成要員

艦橋 艦長（航海長） 本山美由紀 ♀

中佐

副艦長（船務長） サライト・E・カ

サラ ♂ 少佐

参謀長（戦術長） 秋月優一 ♂

大尉

通信士 タニア・ロツクハ

ート ♀ 軍曹

坂上紫苑 ♂

少尉

エルバ・マクドガル

♀

中尉

管制士 ロバート・マクス

ウェル ♂ 伍長

荒

見崎琴乃 ♀

少尉

天宮進 ♂

准尉

操舵士

ウィリ

ング・シルバーフィールド ♂ 准尉

みやまえ しいね 曹長

戦術課 CIC 班長 ジョナサン・マクラーレン ♂

大尉

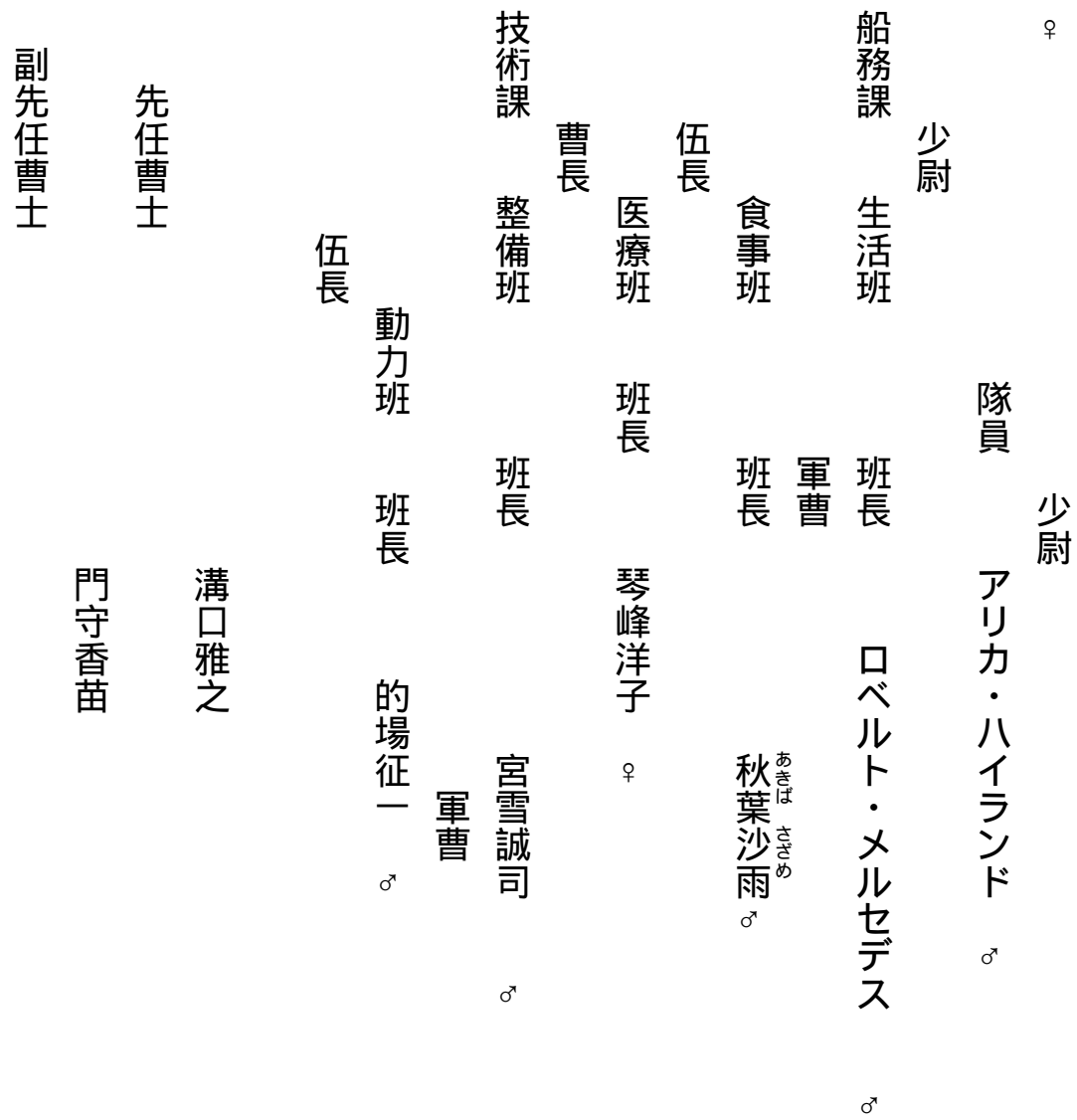
情報班 班長 セリナ・ルノー ♀

少尉

戦闘機隊 隊長 高島早紀 ♂

大尉

隊員 神野飛鳥



戦術課の課長（戦術長）は参謀長の秋月優一が、船務課の課長（船務長）は副長のサライトが兼任している。技術課の課長（技術長）は整備班班長の宮雪誠司が兼任する。

艦長は艦運用における最高責任者。

航海長は艦長、副長、参謀長とともに艦の進路や運用方法を思索するもの。航海術のエキスパート。艦長が航海長を兼任することも多い。そこで決定されたことは船務長、戦術長、技術長に報告され下士官へと下命される

副艦長は艦運用に関する様々な書類の作成と、艦内で発生した問題や訓練の評価についての報告書を作成する。艦長の補佐

を主な仕事とする。

戦術長は戦術課の各班長が作成した、必要整備事項を技術課に提出するのが仕事となる。

艦内は禁煙だが、各場所に喫煙コーナーが設けてある。

艦内の空気はエアクリーナーで浄化して循環しているが、エアクリーナーの効率向上のため、火気の使用は船務長、もしくは艦長の許可が必要になる（整備において溶接が必要でも報告が必要になる）。

5・各部門の主な仕事

艦橋↓艦の中央司令局。全ての決定はここより出される。

・艦長

↓艦の最高責任者。戦闘司令を行う事が主な仕事。最終決定権を持つ。

・副艦長

↓艦長の補佐役。艦長の秘書と同等の職務になる。訓練の報告書を艦長に提出したりすることが主な役割。

・参謀長

↓作戦立案の責任者。艦長の戦闘時の補佐官。

・航海長

↓艦の航路設計の立案者。実務上、艦長が兼任すること

が多い。

・船務長

↓船務課と技術課の責任者。実務上、副艦長が兼任することが多い。船務の都合上、先任曹士との関わるが多い。

・戦術長

↓艦に搭載された兵器の運用に関する責任者。実務上、参謀長が兼任することが多い。戦術科課長

・通信士

↓ 艦内、艦外への通信を行うクルー。

・管制士

↓ 艦の状況を把握し、最も適切な処置を提案し、それを実行するクルー。

・操舵士

↓ 艦の舵取り役。艦の方向、加速、速度を命令通りに実行することが仕事となる。

戦術課 ↓ 戦術の実務チーム。参謀長、戦術長とともに作戦立案を任される。

・CIC

↓ 艦のレーダーや兵器を実際に運用するチーム。

・情報班

↓ 戦闘中やそれ以外に置いて、様々な情報を収集し、それを統括するチーム。戦闘中はCICと連携して情報処理を行う。CICの別室に情報管制室が設けられており、勤務中は殆どそこにもりきりとなる。艦内の機密保持もこの班の重要な仕事。

・戦闘機隊

↓ 艦に搭載された戦闘機のパイロット。

船務課

↓ 艦内の生活レベルを保つために編成されるチーム。

・生活班

↓ 艦内の風紀を保つ実務チーム。物資の補給と管理、艦内清掃、警備等がその主な仕事となる。

・食事班

↓ 艦内の炊飯に従事する実務チーム。

・医療班

↓ 艦内の衛生や、負傷兵の介護を仕事とする実務チーム。
軍医と看護師がその構成メンバーとなる。心理カウンセラーも乗務している。

技術課

・整備班

↓ 戦闘機をはじめ艦内の、動力炉を除くあらゆる機械を

整備する実務チーム。

・動力班

↓ 艦の心臓とも言える動力炉（プラズマ核融合エンジン）を管理する実務チーム。動力炉の整備もその実務の内に入る。

艦橋の上部、戦術課の班長は士官でしめられているが、船務課、技術課のほぼ大半（全員といってもいい）が下士官でしめられている。

先任曹士

下士官の実務リーダー。士官と下士官の実質的なパイプ役となる。下士官からは、艦長よりもおそれられる存在。大抵は下士官からのたたき上げのベテランがこの役職に就く。そのため、士官からも一目置かれる存在になる。

6・試作艦プロフィール

戦闘機搭載型ミサイル巡洋艦アークソルジャー

全長259m 標準質量12000t、最大積載質量、19900t

火星統合軍の試作艦。従来のミサイル巡洋艦と違い、戦闘機を3機搭載できるようになり、正式な名称は戦闘機搭載型ミサイル巡洋

艦アークソルジャー。戦闘機が搭載できることにより、その戦術的意味合いが大きく向上することとなる。レーダーが全集探索可能なものであることはこの時代に置いては標準でありイージスと呼ばれる全集探索機能も標準とされている。制式に量産化が決定したときこの艦の後継機に当たるものにはブリーナクの名が与えられる。

全周を常に探索し、特定の目標に対しては指向性の強い可動式レーダーが使用される。

ミサイルの操作はもちろん、自艦以外の艦から放たれたミサイルも操作することができる。

ミサイルランチャー数70門。ミサイルのランチャーには既に搭載可能ミサイルの半数が装填状態で保管されているのでエマーゲンシー時に素早い発射が可能となる。

また、発射されたミサイルは自動的に装填されていくので、ミサイルの残段数に注意しておくだけでよい。ミサイルは装填されている分にはすべて同時発射が可能で、この艦では最大で70本のミサイルを同時発射することができる。ミサイル発射から再装填まで平均して15秒必要になる。その気になれば30秒ですべてのミサイルを撃ち尽くすことも可能。

システム向上より、一度に170の目標を同時索敵し、ミサイルランチャーと同数の目標を同時迎撃することが可能となる。

なお、搭載されている核融合エンジンは新型のものが搭載されており、従来型と規模は変わらないが、出力が向上している。

レーダーレンジ：最大28700km、全周15200km

武装（括弧内はランチャー数）

可動式ビーム砲×3（艦首に2門、艦尾に1門）

対空レーザーファランクス×3（艦の両サイドに2門と艦尾に1門）

スタンダード対空ミサイル×40（20）

シースパロー短SAM×40（20）

ハーブーン対艦ミサイル×44（22）

トマホーク対艦巡航ミサイル×16(8)

戦闘機搭載型ミサイル駆逐艦ブレイブアームズ

全長228m、標準質量9900t、最大積載質量11400t
アークソルジャーと時期を同じに作られた試作型のミサイル駆逐艦で、その名の通り実験的に戦闘機を搭載する能力を持っている。

アークソルジャーより搭載能力は低い、小型戦闘機2機を収納、整備する事ができる。戦闘機等細事の船体重量は従来型よりも重い、戦闘機をはき出した後は従来型よりも軽くなる。しかし、戦闘機がエアカバーをすることが前提となっているので、その戦闘力は従来型より格段に向上している。搭載している戦闘機はストームブリンガーとバーニングシールドだが戦況によってはトルネードランサーと交換することもできる。正規の量産ラインに乗った機体にはヴァリスの名が与えられる。ランチャー数門。この艦は、主に中距離戦闘を重視されているので、遠距離用のミサイルは少なめだが、中距離用のSAMは巡洋艦よりも多い。その運用の目的は前線に置いて、敵ミサイルおよび小型戦闘機の迎撃と、巡洋艦クラスの戦闘艦に対する牽制。

武装

可動式レーザー砲	4
対空レーザーファランクス	3
スタンダード	20(10)
シースパロー	50(25)
ハーブーン	10(5)
トマホーク	6(3)

強襲先行偵察艦ハイウォーリア

全長220m、標準質量8900t、最大積載質量9200t
アークソルジャーと時期を同じに作られた試作艦。軍艦としての新しいカテゴリを創造した艦で、戦闘能力を極限にまで削除しそ

の代わり索敵レーダーと情報処理装置を詰め込めるだけ詰め込んだ情報艦。この艦が拾った情報は処理され艦隊の司令官へと届けられる。その結果、司令官は情報処理の仕事が削減されるのでよりいっそう艦の運用に専念できるようになる。やりようによっては他の艦が発射したミサイルを最大120本分制御することもできる。クーデターとの戦争中はまだ強襲先行偵察艦のカテゴリーが構築されておらず、特殊駆逐艦という扱いだった。クーデター軍との戦闘に置いてたびたびこの艦によって白狼の艦隊は窮地を逃れられたために、この艦が最も早く量産化されることとなる。ソノブイと呼ばれるものを配備し、それをミサイルに乗せて発射するシステムも配置されている。戦場におけるレーダーネットワークの要の艦として位置づけられる。

ソノブイとは艦から離れた場所に配置される小型レーダーでそれ自体は自走しないが、その半径5000kmを索敵し最寄りの艦にその情報をリアルタイムで送信するものである。それを多数配備することでかなり広範囲の空間を索敵することができるレーダー網を構築することができる。この艦から発射されたソノブイはリアルタイムでこの艦に情報を転送し、この艦が情報処理をする。やりようによれば火星圏すべての空間を一つの艦が掌握することもできる。ソノブイ自体は畳半畳ほどの大きさでフェイズドアレイレーダー方式で全周360°をリアルタイムで索敵することができる。バッテリーの寿命はおよそ12時間。大型のものになると長時間の運用が可能となる。ちなみに、レーダーを搭載しているこれをソノブイというのはむかしからの習慣から。

レーダーレンジ：最大32000km、全周23800km

双翼艦クロウランサー

全長272m、標準質量17900t、最大積載質量21600t

大型のミサイル巡洋艦。艦砲を廃し、ミサイルの運用にのみ特化した次世代試作艦。主に戦場の後方に位置して、ひたすらミサイ

ルを撃ち続ける事が役割。強襲先行偵察艦とのタッグを視点に考えられていたので、この艦自体ミサイルを撃つだけでそれを制御するシステムはかなり簡略化されている。双翼艦がミサイルを放ち、強襲先行偵察艦がそのミサイルを前線近くで制御するという戦法が考えられていた。しかし、その機能に重大な欠点が見つかったためクーデター鎮圧後にこの艦が量産化されることはなかった。その3年後ようやく量産のめどが立つ。ミサイルランチャー数80門。

スタンダート 40(20)

シースパロー 40(20)

ハーブーン 50(25)

トマホーク 30(15)

7. 軍事情勢について

近年の宇宙戦争においては巡洋艦などの戦闘艦の価値は、ミサイルを運用することに重点が置かれ、徐々に格闘戦を考慮に入れない設計が組み込まれていく。

軍はより小型で高機動で低コストな戦闘機の開発を進める。

そのあおりを受けて空母のバリエーションもかなり増え、従来の大型空母から中型、小型空母(戦闘機搭載艦)が多く生産されるようになる。

そしてさらに、大型空母の重要性が疑問視されるようになる。艦隊における機動力を重視すれば大型空母が存在すると艦隊の機動力が落ちたことになるという指摘から、大型空母に変わり中型空母、小型空母がこれからの主力となる流れが発生する。

さらに、戦闘機が搭載できるのは空母だけなのは効率が悪いという観点から、技術進歩の手助けもあり、戦闘機を搭載できる巡洋艦と駆逐艦が試作されることになる。

それ以降に建造される巡洋艦や駆逐艦はすべて戦闘機搭載能力を持つようになる。

また、それとは別の観念から、情報戦に特化した艦の必要性が指摘され、戦場に置いて荷物にならないぎりぎりの武装のみを搭載させ、他の設備をすべて情報処理システムをに置き換えた情報艦（強襲先行偵察艦）の建造も急がれる。

前世紀に活躍した大型戦艦などはすべて退役して今では戦場にはいない。

というのは、かつてはミサイル技術が熱光学兵器より劣っておりミサイルを撃つよりレーザーを打つ方が効率がよかった時代だったので、大口径で高出力、長射程のレーザー砲が重宝される時代だった。

しかし、技術革新の恩恵でより正確に着弾し、より長い距離を航行するミサイルが開発され、さらに高性能な戦闘機が開発されて以来は、大口径レーザー砲ではそれを索敵し迎撃することはできなくなった。

それ故、無駄に大きくそして重い戦艦はその立場を追われることとなった。

戦線から除外された戦艦はい一時期は各コロニーの砲台のような役目をしていたが、それもやがて老朽化のあおりを受けてすべて解体され、空母などに改造されることとなった。

宇宙はミサイルと戦闘機の時代に突入することとなる。

現行の戦闘艦の最大の目標は、ミサイル運用にあり、備え付けられている稼動砲やフランクスはあくまで最終防衛のためだけに用いられる。

艦砲の多くにはレーザーを代表する熱光学兵器が採用されているが、前条におけるレーザーネットワーク技術の進歩から、戦場は何十万kmもの範囲に広がり、その先にある目標を砲撃するためにはかなりの精度を有する照準装置が必要となる。現代の技術では、1万kmあたり、だいたい±50mの誤差が生じてしまう。それではとてもではないが砲撃を当てることなど不可能であるため、ミサイルが使用されるようになった。

8・ミサイルについて

スタンダード

一般的な対宙ミサイル。射程はハーブーンより少し短い、その分精密なコントロールが可能。主に敵の小型機や敵のミサイルを迎撃することに使用される。艦からのレーダーの反射波を受けて的に突撃する。艦は自艦のみではなく、他艦の反射波も利用して多方面での索敵が可能となる。対宙防衛の要であることはかつてと同じ。

シースパロー

一般的な迎撃ミサイル。その目的は中距離～近距離での使用が主になる。敵の小型機やミサイルを迎撃、敵艦の撃破をサポートするなどスタンダードとほとんど変わらない。ただし、クロスレンジ専用なので即応性、命中精度に秀でる。

ハーブーン

遠距離対艦ミサイル。敵の軍艦を撃破することを目的に開発されたもの。ミサイル巡洋艦にはこれが多数配備されている。弾頭は様々なに交換できる。

トマホーク

対艦巡航ミサイル。長距離にある目標を攻撃するためのミサイル。ハーブーンより大型で破壊力も高い。たいてい、距離が開いている戦闘の前半戦に敵艦隊に大量に打ち込むものとして使われる。

ラビット・ファイアー

戦闘機に搭載することを目的とした小型ミサイル。主に対艦用として開発されたもので、小型ミサイルの中では最も打撃力に秀でる。

スナイプ・ハンター

戦闘機に搭載することを目的とした小型ミサイル。主に迎撃用に開発されたもの。命中精度を主観として開発され、主に敵小型機やミサイルの迎撃を行うことが目的。対艦ミサイルとしての打撃力は心許ない。

ストーム・バンガード

命中精度と打撃力の両方を併せ持つ最新式の小型対艦ミサイル。実戦配備されているが、上記のミサイルに比べてかなり高価なので一部の戦闘機にのみ配備されている。

もし、ミサイルが敵に当たる前に敵が撃沈した場合、そのミサイルは次の目標に向かって飛んでいく。ミサイルが発射されたとき、最初の目標を第一優先目標に設定し、同時に発射されたミサイルとの折り合いをつけて第二、第三優先目標が自動的に設定される。レーダーは多くの艦艇やソノブイが発するレーダーの反射波を受けて索敵される。

なお、これらのミサイルの名称は旧時代から受け継がれたものだが、受け継いだのは名称のみで旧時代の派生ではない。

距離感

・近距離・・・100から10kmのあたり。10km以内は至近距離になる。基本的に軍艦はこの距離以下では戦闘をしない。

・中距離・・・近距離からレーダーレンジの半分あたりまでのこと。艦のコントロールで精密射撃ができるぎりぎりの範囲。

・遠距離・・・中距離から長距離の半分あたり。このあたりになると、ミサイルの独自の管制でないと的に当たらない。

・長距離・・・基本的にはレーダーレンジの半分より向こう側。これ以降は艦のコントロールだけでは精密射撃ができず、ミサイルの索敵能力によることになる。

・超長距離・レーダーの索敵が届かない範囲。この先のことは見通すことが不可能となる。

9・白狼の艦隊

- ・戦闘機搭載型ミサイル巡洋艦アークソルジャー
〔本山美由紀〕戦佐
- ・大型ミサイル巡洋艦クロウランサー（双翼艦）
〔ジェイソン・ケネディー〕戦佐
- ・ミサイル巡洋艦ブルー・アンサラー
〔佐々木直海〕准戦佐
- ・戦闘機搭載型ミサイル駆逐艦ブレイブアームズ
〔井上洋介〕戦尉長
- ・特殊ミサイル駆逐艦ハイウォリア（強襲先行偵察艦）
〔キム・バレンタイン〕戦尉長
- ・ミサイル駆逐艦プレアデス・レッド
〔安藤幸恵〕戦尉
- ・ミサイル駆逐艦プレアデス・シルバー
〔アルバート・モントーヤ〕戦尉
- ・小型空母オーガスト・ブラック
〔ジェイムズ・ファゴット〕准戦佐
- ・小型空母オーガスト・ブルー
〔藤原修平〕戦尉長
- ・中型空母ブラック・パンサー
〔荒見崎稟〕准戦佐

戦闘機181機

10・軍艦プロフィール

・ミサイル巡洋艦

宇宙戦闘における主力艦にして、ミサイル運用の要。戦術的には中型空母の次に重要視される。

・駆逐艦

ミサイル巡洋艦に継ぐ主力艦。目的はほとんどミサイル巡洋艦と変わらないが、より汎用型となっている。空母の護衛を行ったり前線で戦ったりとその運用は幅広い。巡洋艦より二回りほど小さい。

・強襲先行偵察艦

電子、情報処理を目的とした電子情報艦。戦闘力を最小限にした代わりにレーダーやジャマー、情報処理装置を積み込めるだけ積み込んでいる。やがて艦隊戦に置いてはなくてはならない存在になる。戦闘主力艦と戦闘補助艦の中間に位置する存在でもある。

・補給艦

戦闘補助艦。戦闘主力艦に対してミサイルや燃料の補給を主な目的とする。

・掃海艦

艦隊先行の妨げとなる障害物や機雷などのトラップを解除する役割を持つ戦闘補助艦。効率を上げるため強襲先行偵察艦と共に行動することが多い。

・空母

戦闘機の運用を主な目的とする艦で空母機動艦隊の要。大型、中型、小型の空母がありそれぞれ戦闘機の搭載数が異なる。ただし、最近になっては、大型空母を所有するとその分機動力が激減するため、中型、小型が重宝される傾向にある。不必要になった戦艦を解体して改造したものも多い。大型空母は戦艦より二回りほど大きい

が、中型空母は巡洋艦と戦艦の間ぐらいの規模で、小型空母は巡洋艦と同じぐらいの規模となる。戦術的、戦略的に最も重要視される軍艦。

・強襲揚陸艦

陸軍や空軍などを大気圏下に投入するときに使われる艦。大気圏突入能力、離脱能力を有し、大気圏下に着水したときはそのまま通常の軍艦として行動することもできる。主に海兵隊を投入する艦と戦車や航空機などの戦闘兵器を投入する艦に分かれている。

・戦闘機搭載型ミサイル巡洋艦

アークソルジャー以降のミサイル巡洋艦。巡洋艦に戦闘機を搭載することにより飛躍的に戦闘力が向上するというを証明した艦であり、そうすることにより戦闘機に対する指令が空母を介して行うよりも鋭敏化されることがさらに明らかになった。やがては戦闘機搭載艦をミサイル巡洋艦、駆逐艦など主力艦に広げ、事実上戦場から大型空母をなくしていこうという動きが高まっていくことになる。

・戦闘機

空母や戦闘機搭載艦に収容されている一人、ないしは二人乗りの小型戦闘機。その主な役割は編隊を組んで敵の軍艦やミサイルを迎撃することにある。前線での戦闘のほとんどはこれと駆逐艦が行う。格闘用戦闘機、爆撃機、迎撃用戦闘機、情報収集型戦闘機がある。

・戦艦

砲撃を目的として設計された大型艦。あくまで対艦戦用に製造されているのでミサイルや戦闘機を迎撃する能力は皆無といってもいい（これが現役だった時代はミサイルは迎撃する必要の無いほどあたらなかったため）。大口径レーザ砲が多数装備されている。兵器博物館にいれられたものはいはすべて退役して空母に作り直さ

れている。

戦闘機搭載数

大型空母↓160機
中型空母↓90機
小型空母↓43機
戦闘機搭載型ミサイル巡洋艦↓3機
戦闘機搭載型ミサイル駆逐艦↓2機

11. 戦闘機プロフィール

トルネードランサー（制式コード SF105C）
小型航空爆撃機。小型対艦ミサイル（ラビット・ファイアー）を20基、正面にレーザー機銃を2門搭載している。敵艦に隣接してミサイルを発射、その後は一時離脱し、再突入。ミサイルがつかれば母艦に帰還する（基本はヒットアンドアウェイ）。推進機関は水素燃焼型のブースター（ハイドロ・バーニング・ブースター通称HBB）が1基で各所に姿勢制御用の小型ブースターが取り付けられている。推進機関の性質上長距離航行には向かない。小型対艦戦闘機として設計されているため、他の戦闘機との格闘戦には向かない。コードのSFの後ろの1という数字は対艦戦闘機ということの意味する。ちなみに2は対小航空戦闘機。最後のCは小型^{コンパクト}という意味、中型はM、大型はL^{ラージ}。製造費、5800万円。

ストームブリンガー（制式コード SF204C）

小型航空戦闘機。トルネードランサーとは違対艦ミサイルを搭載していない分小型迎撃ミサイル（アイアン・クロウ）と機銃の量を増やし、戦闘機との格闘力を向上させている。アイアン・クロウ

は8基、レーザー機銃は前方に2門、後方に1門搭載されている。前方の2門と小型ミサイルはパイロットがマニュアル操作でオートロック方式（手動に切り替え可能）、後方の機銃は可動式でオートロックで自動発射方式（マニュアル操作に切り替えることも可能）。推進機関はトルネードランサーのそれと変わらない。小型ミサイルはオプシヨン方式でランチャーごと交換が可能となっている。電装系はすべてバッテリー方式（容量は航続時間のほぼ2倍）。各所に油圧システムが使われている。主に前線での戦闘機との格闘戦とミサイルの迎撃に重点が置かれている。建造費、5600万円

ライトニングシールド（制式コード SF304M）

中型航空戦闘機。推進機関はHBBが一基で、複座型。主に巡洋艦や駆逐艦、空母が対応しきれないミサイルや戦闘機を迎撃する戦闘機で、その武装は攻撃用と言うよりは迎撃用の装備が主となっている。スタンダード対宙ミサイル7基とシースパローSAMが6基、可動式レーザー機銃が前方に2基。元々格闘戦用ではないので、武装が重く、機動力も低く、また搭載艦から離れることを前提にしないので航続距離も短い。建造費、7400万円

バーニングシールド（制式コード SF305C）

小型航空戦闘機。ライトニングシールドを小型化したようなもので、その目的や運用方法はライトニングシールドと変わらない。ライトニングシールドよりも多少機動力は高いがトルネードランサーに比べれば遙かに低い。武装はスタンダード4機とシースパロー4機、レーザー機銃が前方に2門。建造費、5800万円

バーニングサンダー（制式コード PSF1101L）

試作対艦戦闘機。大型で核融合エンジンを搭載する。惑星間航行を目的とした対艦戦闘機で核ミサイルの運用も考慮に入れられているがその必要なしとして試作機が生産される前に破棄された。

ソードフィッシュ（制式コード SF402M）

軍艦がカバーしきれない情報収集を変わって行う偵察機。武装は施されておらず、機体には大型のレーダーが搭載されている。レーダーで情報収集して機内のコンピューターで処理をした後に軍艦へと転送される。ソノブイをいくつか装備する。建造費、6700万円

付録設定集（１）（後書き）

蛇足だったかもしれないが、巻末に付録を載せるのは夢だったので記載した。科学的に無理がある設定はなるべく配したつもりだったが、ひよっとすれば矛盾なり無理があるかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9468e/>

宇宙戦記

2010年10月28日07時05分発行